様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ００７４０

研究課題名（和文）家族を介護し、看取った死別経験者の心理変容プロセスに関する縦断的研究

研究課題名（英文）Longitudinal study on psychological change process of bereaved experienced carers and family members

研究代表者
渡邉　照美（WATANABE, Terumi）

佛教大学・教育学部・准教授

研究者番号：６０４４１４６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究によって，身近な他者との死別経験について，従来言われていたような，悲嘆はある特定の困難な過程を経なければいけないというわけではなく，死別経験に圧倒される人もいれば，圧倒されず人生の一部として捉える人もいることが明らかになり，それが死別経験後のレジリエンスであると示すことができた。また，死別経験後のレジリエンスプロセスを示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では，実際に看取りのケアを経験した方を対象にしたため，本研究結果を発信することで，看取りのケア，死別といった経験者の生の声を広く社会に伝えることができる。それは，経験者だけでなく，未経験者にとっても，その内的世界を追体験でき，死別経験者の心理について理解が深まるという効果が期待できる。また，看取りから死別，そして現在の長期的な心理変容プロセスを示すことで，生涯発達が遂げられる可能性を示すことができたため，現在，介護をしている方や死別後の喪失感で苦しんでいる方にとって，そして社会全体にとって，ケアすること，大切な人を喪失することの意義を問い直せたのではないかと考える。

研究成果の概要（英文）：　This study does not mean that grief has to go through a certain difficult process, as has been said in the past, regarding bereavement with familiar others, and some people are overwhelmed by bereavement experience. It was revealed that some people were not overwhelmed and considered as a part of their life, and it was possible to show that it was the resilience after bereavement experience. I could also show the resilience process after bereavement experience.

研究分野：生涯発達心理学

キーワード：死別　死生心理学　生涯発達　介護　ケア

１．研究開始当初の背景

人生は獲得と喪失の連続である。生きている限り，身近な他者の死は避けられない。それらの経験は多くの場合，耐え難い経験であろうが，人は大切なものを喪った時，変化する可能性を内在している。喪失経験後の肯定的な変化については 1990 年代後半から始められた（渡邉，2008）。現在では，欧米において，ハンドブックが出版され，喪失経験後の心の発達が，一研究領域として確立されつつある（Calhoun & Tedeschi，2006）。本邦においても，価値ある知見が提出されている（安藤ほか，2004；坂口，2002；末松，2008）。

また，生涯発達において，家族をケアする経験は重要な心理変容をもたらす契機となる。しかし，高齢者介護や子育てといった「ケアすること」は，非常に重要かつ今日的問題であるにも関わらず,「ケアすること」に対して，正当な評価が与えられることは少ない。高齢者虐待や幼児虐待がクローズアップされるばかりで「ケアすること」はネガティブな仕事として見なされがちである。しかし『On Caring』（Mayeroff，1971）や『Caring』（Noddings，1984）のように「ケアすること」の肯定的な意味を提示した研究もある。ただし，以下の課題が残されている。

第 1 の課題として，看取りのケアをすることによって，また死別することによって，どのような心理変容が起こるのかについては，知見が積み上げられているが，どのようなプロセスで発達・変容するのかについての検証は十分でないということがあげられる。第 2 には，上記の領域の研究においては，わが国では横断研究が多く，縦断研究は少ないという課題があげられる（河合・佐々木，2009）。横断研究においては，調査時点での心理変容については明らかにできるが，生涯発達の観点から捉える際には，複雑で多様な人の生き方を明らかにできる縦断研究が有効である。本研究において，縦断研究の視点を取り入れ，ナラティブアプローチをすることにより，死別経験後の心理変容について，長期的プロセスを解明できると考える。

申請者は，これまで生涯発達の視点から，死別経験という喪失の意義，ケアすることの肯定的な変化を量的側面（渡邉・岡本，2005；渡邉，2011）とナラティブアプローチによる質的側面の双方から検討してきた。特に，平成 16・17 年（以下，10 年前の調査）に実施した面接調査（渡邉・岡本，2006）では，41 歳から 79 歳（平均年齢 61.0 歳）の 18 名を対象に，看取りのケアに対してどの程度自己投入を行い，積極的に関わっていたのか，また死亡時から現在に至るまで，経験した死別をどのように捉えているのか等の質問を行った。その結果，身近な他者を看取る経験により，死に対する思索が深まると同時に，生きるということを学んでおり，人格的にも発達することが明らかになった。また看取りのケアについては，日常生活を維持するためのケアを行うだけでなく，こころのケアとその人の人生を完成させるために必要なケア（例えば，思い出の場所を旅行する，自分史をまとめる）のケアを行うことが，ケアする側にとって，ケアすることの意義を見いだせる重要な要因であることも明らかになった。

以上がこれまでの申請者の研究による知見であるが，その中で「時間」という概念の検討については不十分なままであった。死別経験のみならず，何かを喪失した場合，我々は「時間が癒やしてくれる」,「時間が薬」という意味合いの言葉を使用する。しかし，ただ「時間」の経過が，対象者を「癒す」のではなく,「時間」の経過と共に，その経験を主体的に位置づけていくという関わりがなければ変化は認められないと推察されたが，その点については，横断研究では限界があった。そのため，縦断的に研究を行う必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究は，家族を介護し，家族を亡くされた死別経験者の心理変容プロセスを縦断的に解明することが目的である。そのため，平成 16・17 年実施の面接調査の協力者を対象に，第 1 に，前回調査時点と現時点での看取りのケアと死別経験の捉え方に相違があるのかどうか,第 2 に，相違がある場合はどのような変容が起ったのかとその関連要因について，第 3 に，看取りのケアと死別経験の意味づけが，どのようなプロセスを経て発達・変容していくのかの 3 点についてナラティブアプローチによって明らかにする。看取りのケア，そして死別という一見ネガティブに思える経験が，生涯発達にとって意味あるものであることを示すことで，社会全体に，ケアすることや死別という喪失を経験することの重要性と意義が問い直せる。

３．研究の方法

本研究では，家族を介護し，看取った経験のある死別経験者の心理変容プロセスを縦断的に明らかにするために，平成 16・17 年の調査協力者 18 名のうち，9 名（男性 4 名，女性 5 名）を対象に，ナラティブアプローチによる面接調査行い，当事者の実態に，より近い分厚い記述を目指す。具体的には，以下の方法で研究を遂行した。まず，本研究に関連する国内外の研究動向をレジリエンスの視点から整理し，平成 16・17 年に実施した面接調査のデータを再分析する。次に，新たに半構造化面接を実施し，前回調査から約 10 年が経過した現在，看取りの経験をどのように捉えているのかという点を明らかにし，前回と今回の捉え方が異なるとすれば，その相違をうむ関連要因について検討する。

４．研究成果

（１）レジリエンスの視点から検討した面接調査の再分析結果

平成 16・17 年に，身近な他者を亡くした人の死別経験後の人格的発達とその関連要因を明

らかにするために，がんで近親者を亡くされた 18 名（男性 8 名・女性 10 名）に対し，半構造化面接を実施した。そして①死別に対する積極的関与，②死別に対する主体的位置づけの 2 つから分類した（渡邉・岡本，2006）。しかし，2 つの課題が残った。1 点目は，上記の 2 つの視点によると，看取りのケアに積極的にコミットしてはいたが，死別経験後の変化は特にないと語った協力者は，死別経験後，発達していないと分類されることになった。しかし，面接を実施し得た語りから，例えば，死を生の一部と考えており，特に変化しないということも含めて，死別経験後の発達なのではないかという筆者の疑問が浮かんできたが，その点について解明できなかったことである。2 点目は，死別経験後の死別の捉え方について，時間を重視したプロセスが描けなかったことである。これらの課題を明らかにするために，レジリエンスの視点からデータを再分析することとした。

ここで，なぜレジリエンスの視点を採用したのかについて説明を加える。Bonanno（2009/2013）によると，「最近まで，死別や悲嘆に関するほとんどの理論は，死別は進行的な過程であり，その過程全体を克服するには多くの時間がかかると理解されていた。死別の専門家は実際のところ『喪の作業』（grief work）といった術語を用い，死別を経験した人は皆，喪失を受け入れるには，ある特定の困難な過程を経なければならないとしていた。（中略）私は長年にわって悲嘆を研究して，こういった概念を支持するエヴィデンスをまったく発見することができない。（中略）幸い，私たちのほとんどにとっては，悲嘆はけっして圧倒するようなものでも，終わりのないものでもない。（中略）私たちのほとんどにはリジリエンス（resilience）があるのだ」（pp.17-19）と述べている。つまり，悲嘆は，ある特定の困難な過程を経なければいけないわけではなく，圧倒される人もいれば，圧倒されず人生の一部として捉えることも，またレジリエンスであるということである。

この視点に立って，再分析した結果，環境の変化に柔軟に適応し，喪失を語れることは，語りの内容として，具体的な変化がなくとも，死別経験後のレジリエンスと言える。死別経験後，肯定的な変化が認められることもあるが，肯定的な変化が認められない場合もある。それは，その人のそれまでの人生が影響をしており，死別以前に，死が身近にあったり，死生について考えたりしていた場合は，変化がないと推測できた。レジリエンスの視点から見れば，身近な他者との死別を経験したが，変化はしていない，しかし，それを人生の一部として位置づけ生きているということも発達と言えるという結論に至った。

次に，複線径路・等至性モデル（TEM）の枠組みに基づいて，死別経験後のレジリエンスプロセスを明らかにした。その結果を Figure1 に示した。研究協力者が選択した経路を実線で示し，また実際には選択されていなくても理論上は存在しうると考えられる径路については，点線を用いて可視化し，平成 16・17 年調査時には明らかにできなかった死別経験後のレジリエンスプロセスを明らかにすることができた。

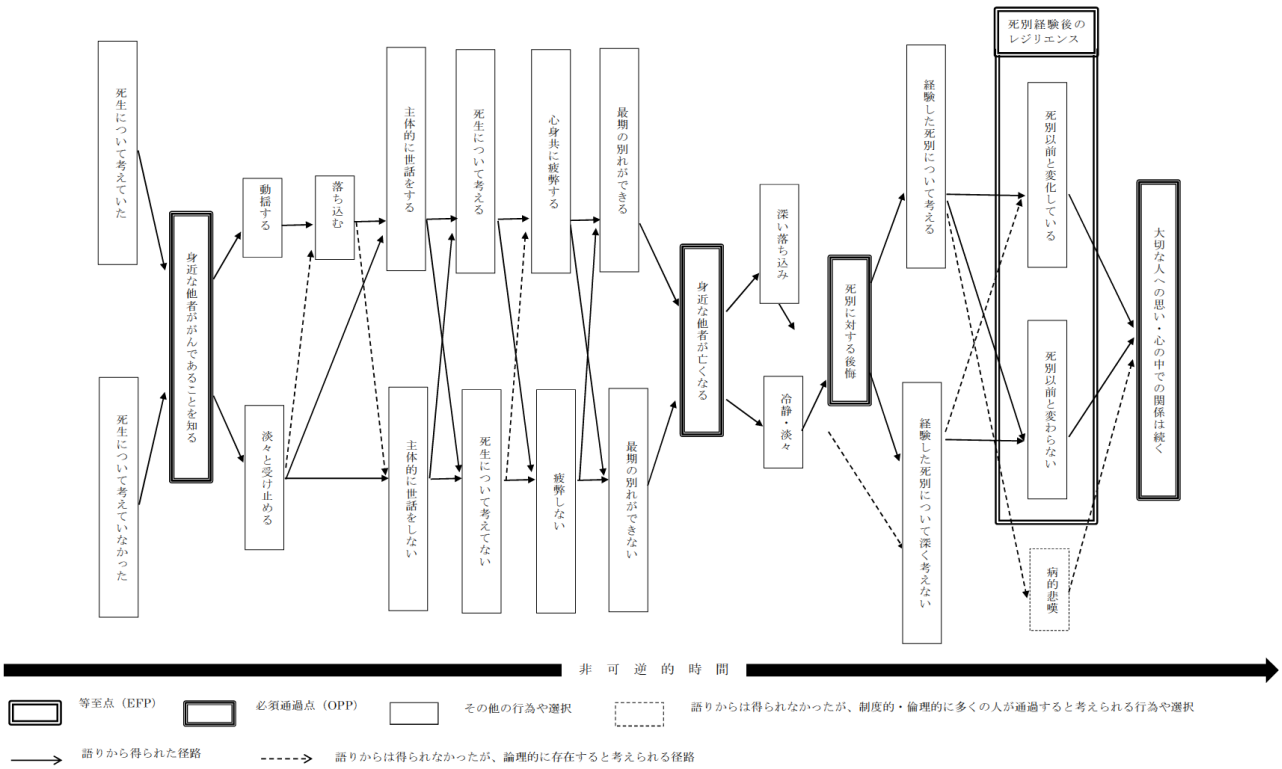

Figure 1　身近な他者を看取り、死別を経験した人のレジリエンスプロセス

（２）身近な他者との死別経験後の心理変容についての縦断的検討

平成 16・17 年の調査協力者 18 名のうち，9 名（男性 4 名，女性 5 名）に対し，面接調査を平成 28・29 年に実施した。前回調査時点と現時点での看取りのケアと死別経験の捉え方に相違があるのかを分析した結果，前回調査時，死別経験後を意味あるものと捉えていた者（5 名）については，現在でもその死別を意味あるものと捉えていた。また，前回調査時，死別を特別なものとは捉えていなかった者（4 名）については，前回同様，特別なものとは捉えておらず，生の延長線上にあるものとして自然に受け止めており，変化は認められなかった。ただし，前回，悲嘆の中にあった者 1 名については，時間の経過と共に，死別を意味あるものとして捉えられるようになったという変化が認められた。レジリエンスの視点から考察を加えると，どのような経験，意味づけであっても，身近な他者との死別経験後，日々の生活を営んでいること，また喪失を語ることができることは，死別経験後のレジリエンスなのではないかと推察された。

前回調査時との心理変容の違いについては，身近な他者との死別経験も増え，調査協力者自身も年齢を重ねていることから，死をより身近に感じるようになったと全員が語った。そして，前回調査時には理解しようとしても理解し辛かった死別相手の死に対する思いがどのようなものであったのか，心身共に衰えるということがどういうことなのかといった，故人に思いを重ねることができるようになったとの語りが多く得られた（9 名中 7 名）。死に対する不安・恐怖については，十分生き切ったと思うこともある反面，やはり死ぬということは怖いと思うこともある，まだ想像ができないといったアンヴィバレントな感情があることが明らかになった。

本研究の課題として，死別経験後のレジリエンスプロセスは明らかにすることができたが，死別経験後の捉え方については，前回調査時と現調査時とほぼ変化が認められなかったため，詳細に明らかにすることができなかった点である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①菅原伸康・渡邉照美，2017，高等部における重度・重複障害のある生徒の生活単元学習のあり方に関する実践的検討－京都府立城陽支援学校重心教育部を例に－，教育学論究，9，119-125，査読無

②菅原伸康・渡邉照美，2016，障碍の重い子どもの「授業再考」－教育的係わり合いにおける実践事例からの考察－，教育学論究，8，73-81，査読無

③渡邉照美・青山芳文・稲冨まどか，2016，障害児・者との接触経験の時期および内容と障害児・者に対する態度との関連について，教職支援センター紀要，7，11-28，査読無

〔学会発表〕（計 7 件）

①渡邉照美，2018，院内学級の現状と課題－教員を対象とした調査から－，日本教育心理学会第 60 回総会，ポスター発表

②渡邉照美　他，2018，死を見つめる経験から「生」を捉える－死生心理学の展開（4）死を意識しながら生きるということ－，日本発達心理学会第 29 回大会，シンポジウム

③渡邉照美，2017，がんで身近な他者を亡くした人のレジリエンス－面接データを再分析する－，日本質的心理学会第 14 回大会，ポスター発表

④渡邉照美　他，2017，死生に向き合う際，他者との関係は生の糧となるか，それとも重荷となるか－死生心理学の展開(2)－，日本発達心理学会第 28 回大会，シンポジウム

⑤渡邉照美・菅原伸康，2016，障がいのある子どもの家族のレジリエンス，日本質的心理学会第 13 回大会，ポスター発表

⑥渡邉照美　他，2016，教職希望学生の障害児・者に対する態度－障害児・者との接触経験の時期および内容との関連－，日本教育心理学会第 58 回総会，ポスター発表

⑦渡邉照美・菅原伸康，2015，障がい児育児サークル代表者のアイデンティティに関する縦断的研究，日本質的心理学会第 12 回大会，ポスター発表

〔図書〕（計 8 件）

①渡邉照美　他，2019，新しい教職教育講座　教職教育編⑫　教育相談，ミネルヴァ書房，240，編著

②渡邉照美 他，2019，新しい教職教育講座　教職教育編⑤　特別支援教育，ミネルヴァ書房，239，共著

③渡邉照美　他，2018，質的心理学辞典，新曜社，432，共著

④渡邉照美　他，　2018，世代継承性研究の展望－アイデンティティから世代継承性へ－，ナカニシヤ出版，494，共著

⑤渡邉照美　他，　2018，障碍のある子どものための教育と保育④障碍のある子どものための「文字・数」学習，ミネルヴァ書房，171，編著

⑥渡邉照美　他，　2016，夫と妻の生涯発達心理学，福村出版，310，共著

⑦渡邉照美　他，　2016，はじめての死生心理学，新曜社，294，共著

⑧渡邉照美　他，　2015，障碍のある子どものための教育と保育③エピソードで学ぶ障碍の重い子どもの理解と支援，ミネルヴァ書房，120，編著

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織

(1)研究分担者　なし
(2)研究協力者　なし

※科研費による研究は，研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため，研究の実施や研究成果の公表等については，国の要請等に基づくものではなく，その研究成果に関する見解や責任は，研究者個人に帰属されます。